

大学初年次の授業「保育原理」に関する一考察

山 田 朋 子

Inspection of Frosh's lecture "Principle of Childcare"

Tomoko Yamada

(2017年11月22日受理)

1. 問 題

保育者には、目の前の子どもの変容を的確に捉えた保育を展開するために、保育の質を向上しつづけることが求められている。保育者は自らの保育実践を振り返り、常に学び続ける反省的实践家であることが重要とされる。そのため保育者をめざす保育学生には、答えのない保育を問い続ける保育の専門性を理解した上で、保育者養成校における教育課程のプロセスの理論と実践を融合しながら理解を深め続けることが求められているといえる。従って高等教育機関である保育者養成の大学において、保育学生自身により各授業内容を保育実習や幼稚園教育実習等の実践と結びつけながら理解をすることが必要である。しかしながら、ゆとり世代と称される現在在学する保育学生の特性の課題として消極的な学びの姿勢や答えを求める傾向（山田、2017）が報告されているように、これまでの集団授業形式では賄えない保育学生の資質に関わる個別の課題が山積しており、保育者養成教員には、その対処に迫られる現実も存在する。従ってこれからの保育者養成教員には、保育学生の学習傾向はもとより資質の特性を理解した上で適宜一人一人に適した教授方法を吟味しながら授業方法を改善し関わる事が求められるといえる。

本稿では、筆者が担当する「保育原理」の授業を取り上げ、保育学生自身の自己評価による学びへの成長の実感と保育に関するとらえの芽生えを個別に把握する方法の検証を行う。

1-2. 「保育」に関する受け止め方

保育に関わる保育者へ「保育とは何か」について問いかけると、子どもとの関わりに関する取り組みはもとより子育て支援など保育者としての専門性あるいは保育者自身の興味や関心に基づいた多岐にわたるキーワードが挙げられる。

「保育」という用語は、広義には「保育所・幼稚園の乳幼児を対象とする“集団施設保育”と家庭の乳幼児を対象とする“家庭保育”の両方を含む」とされ、狭義には「保育所・幼稚園における教育を意味する用語」とされる（森上、2010）。児童福祉法第39条には「保育所は、保育を必要とする乳児・幼児を日々保護者の下から通わせて保育を行うことを目的とする施設（中略）とする。」とされており、家庭における育児としての保育の意味合いが強い。また学校教育法第22条には「幼稚園は義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする。」とされ、保育所や幼稚園における集団での保育の場の意味を示しているといえる。また、森上ら（2015）の保育原理テキストには『乳幼児もしくは18歳未満の児童を対象とする「保護」と「教育」（もしくは教育）を行う機能を意味する。』と説明されている。

一方、天野（2015）は、保育原理テキストにおいて『児童福祉法や関連する法令等に「保育」という言葉の定義はない。（中略）すでに明治時代から保育という言葉が使われ（中略）おおよそ、保護、養育、あるいは教育を含んだ意味合いで使われてきたといえる。』と述べている。このように、「保育」に関する意味の受け止め方は保育現場、法律、書籍や対象により表現する意味が混在していることが伺える。保育に関する専門用語が定義づけられていない中において、保育者養成校に入学した大学生が1年次前期に受講する「保育原理」に用いられる「保育」の理解は保育者としての基礎理解を培う重要な意味を担うことの難しさを有しているといえる。

1-3. 授業「保育原理」の位置づけ

この「保育」を業とする保育士、幼稚園教諭、保育教諭を含む保育者の仕事は次世代を育成する根幹を担うもので、人類が継続的に、これからもよりよく発展して

いくために非常に重要な役割を担っているともいえる。従って職業として保育者をめざす保育学生が、その「保育」の専門性理解の第一歩となる保育の原理の基礎的事項を保育士養成校において「保育原理」の授業を通して学ぶことは必修の授業と位置付けられるのである。厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知で指定保育士養成施設指定基準に述べられる保育原理の教授内容を表1に示す。必要な教授内容として、保育の意義となる保育の理念と概念、保育の社会的役割、制度的な位置づけに関する理解と、保育の基本として保育所保育指針や幼稚園教育要領、認定こども園教育・保育要領の理解、保育の特性と保育実践、保育者支援、保育の目標、保育の方法を

表1. 指定保育士養成施設指定基準：保育原理の教授内容（厚生労働省雇用均等・児童家庭局通知）

＜科目名＞	保育原理（講義・2単位）
＜目 標＞	<ol style="list-style-type: none"> 1. 保育の意義について理解する。 2. 保育所保育指針における保育の基本について理解する。 3. 保育の内容と方法の基本について理解する。 4. 保育の思想と歴史的変遷について理解する。 5. 保育の現状と課題について考察する。
＜内 容＞	<ol style="list-style-type: none"> 1. 保育の意義 <ol style="list-style-type: none"> (1) 保育の理念と概念 (2) 児童の最善の利益を考慮した保育 (3) 保護者との協働 (4) 保育の社会的意義 (5) 保育所保育と家庭的保育 (6) 保育所保育指針の制度的位置づけ 2. 保育所保育指針における保育の基本 <ol style="list-style-type: none"> (1) 養護と教育の一体性 (2) 環境を通して行う保育 (3) 発達過程に応じた保育 (4) 保護者との緊密な連携 (5) 倫理観に裏付けられた保育士の専門性 3. 保育の目標と方法 <ol style="list-style-type: none"> (1) 現在を最もよく生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培う (2) 生活と遊びを通して総合的に行う保育 (3) 保育における個と集団への配慮 (4) 計画・実践・記録・評価・改善の過程の循環 4. 保育の思想と歴史的変遷 <ol style="list-style-type: none"> (1) 諸外国の保育の思想と歴史 (2) 日本の保育の思想と歴史 5. 保育の現状と課題 <ol style="list-style-type: none"> (1) 諸外国の保育の思想と歴史 (2) 日本の保育の思想と歴史

学び、さらには保育の思想と歴史、保育の現状や課題を学ぶことが挙げられる。

ひとりの人間が育つということは、誕生から成人まで様々な関わりにより養育され成長し続ける中で育まれることを意味しており命を育み続けることに他ならない。その子育ての営みについての第一義的役割は親である。しかし実際には様々な人と関わる中で成長し、その子育てに関わる専門家として保育者が存在する。保育者の仕事の位置づけや社会に期待されていることに関する基礎や、小学校以降の教育とは異なる実践の基礎である保育の特性を学ぶことが保育者としての基本となる。従って「保育原理」の理解は、文字通り保育の原理原則を理解する、乳幼児教育に関わる保育者養成の根幹教育に位置づけられているのである。このように整理をしていくと、保育学生が保育に求められる専門性の基礎を理解するために「保育原理」の授業に求められる役割はとても重要であることは自明である。同時に、「保育原理」の授業を担当する保育者養成教員にも、一人一人の保育学生の学修内容の理解度を把握した上で授業を展開し理解を深める使命を担っているといえる。特に将来の保育者をめざす保育学生にとっては、保育現場において保育者が常に保育の質向上をめざし学び続けることの保育の原理を、様々な授業を通して理解し習熟する過程と重ねることが肝要である。保育者が反省的实践家として常に目の前の子どもたちを集団の中で一人ずつの成長や変容を的確に捉え関わり続けるのは、命を育む営みの中に組み込まれる保育にゴールや正答はなく、常に保育者として関わる事を自問自答しながら学び続けることであり、保育の質向上に欠かせない保育者の特性であるからなのである。日々、子どもに関わる保育の計画を立て、実践をし、反省評価を基にさらに次の計画へ反映し続ける自己評価サイクルに基づく保育の営みの必要性を理解し、実践しながら構築し続けることを保育学生が保育の本質を保育の原理として理解するためにも、授業中でその仕組みと同様の取り組みを追体験しながら実感し、習得していく授業構成の工夫が求められると考える。それは、一方的な教授方法による学習習熟度の把握に限界があるからである。

「保育原理」をキーワードとする論文レビューを実施したところ、1920年代に倉橋惣三による自発活動と目的活動について保育原理の問題が取り上げられているがその後1960年代まで論文は発表されていない。1970年代となり堀合により自発性を尊重した幼児教育方法として倉橋惣三の保育原理を土台とした研究が主流となっている。1980年代は田中（1982）が教授内容を編成する実証的研究の対象として教科目の「保育原理」を取り上げるなど、教科目の内容に関わる研究テーマが主流と

なっている。特に2000年代となり、短大生の子ども観（竹田、2009）、保育内容の総合的理解を求めた科目間連携（高橋ら、2015）のように「保育原理」の本質を問う研究として保育士や幼稚園教を対象とする子どもの規範意識の育成（森川ら、2016）、保育の営みに関する保育原理や科学的態度、人間の存在との関連（永見、2006）、4年生保育士養成課程の学生の子ども理解（重成、2007）、中谷（2015）は教授内容の分析として保育の価値や意義、理念、原理の整理や「保育の原理」の探究（中谷、2017）がキーワードに上げられる。このように、「保育原理」の教授内容と関連した研究テーマから保育の原理を理解する研究が存在する一方、ブリーフレポート（小川、2008）、アクティブ・ラーニング（住本、2016）、学生の主体的学習（菜原、2017）など授業展開の手法に関して研究テーマに取り上げる傾向がある。これは、保育の原理を取り扱う内容が多岐にわたっており「保育」の言葉の定義が様々存在する傾向と同様に模索し続ける壮大なテーマを保育学生と共に問い続けることを意味するものであろう。

1-4. 授業形態における問題

講義科目の実際に目をむけると100人規模の受講生が対象で、限られた授業時間の中で「保育」に関する理解を求め完全に保障する事はもとより正確に確認することが容易ではない根本的な課題を有していると考える。それは集団授業という形式であり、担当者1名が100人もの学生に一度に関わり理解するには実習等の他の業務で個別に関わる時間の増加が学生の習熟度理解の把握を阻んでいること、さらに学生たちの学習内容に対する理解は同時期に同程度を確実に積み重ねるとは限らず、個人差が存在することが理由に挙げられる。このことを理解した上で一斉集団授業の方法で実施した教授内容の定着を確認する手立てには、おおむね筆記試験の点数化によるものが基本となる。しかしながら、基礎用語の暗記や記述内容による確認だけで点数が高ければ十分に理解出来たと言えない側面を要している。それは知識の詰め込みではなく、その知識をいかに自分の考えとして熟成させながら保育者としての保育観を形成していくか、前述した「保育」の言葉ですら定義されていない乳幼児の世界において専門家である保育者のとらえ方も多様化し、必ずしも共通理解に基づくものが存在しえないからである。反省的実践家についてショーン（2001）が述べるように、『仕事や問題の本質を考えながら、自分の行為を振り返り、自分の持論やノウハウを問い直す「内省的実践」が学ぶ力の理論的な土台（松尾、2014）』であり、『他者を模倣しながらも「疑問を持ち、自分で考えること」が大切（五嶋、2007）』なのである。たとえ一方的な座学による知識を論述できたとしても、熟達され

る保育観に繋がる視野を広げられるかは自分の意見を共有したり、検討したり、異なる意見を交えたディスカッションなどを繰り返す中で、納得したり疑問を持ったりして「行為の中で内省する（松尾、2014）」なかで積み重ねられる生涯保育者として問い続けていくものなのである。しかしながら、授業として「保育原理」も教授される内容の単位習得のために一定の知識の理解を認定する必要がある中で、反省的実践家であり続ける保育者に求められ問い続ける保育に対する考え方や保育内容、保育者観などの本質について何の基準をもって、どれだけ保育の理解できたと証明することができるのであろうか。

授業内容の習熟度と学力効果について大学生の習熟度別クラス編成（田原ら、2001）の検討に取り上げられている教科は英語教育である。また小学校では習熟度別少人数指導が学力に与える効果を小学校別に分析（井上、2014）など研究テーマに取り上げられている。このような他の研究領域で行われている検証の視点を今後、どのように「保育原理」で実施し、その本質の根拠を示すか、大きな課題のひとつに挙げられる。

1-5. 対象学生の授業における全体傾向

経済産業省（2006）は、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力を「社会人基礎力」として、1. 前に踏み出す力（アクション）、2. 考え抜く力（シンキング）、チームワークで働く力（チームワーク）の3つの能力を定義づけている。さらに3つの能力について12の能力要素が挙げられる。1. 前に踏み出す力（アクション）には①主体性、②働きかけ力、③実行力を、2. 考え抜く力（シンキング）には④課題発見力、⑤計画力、⑥創造力を、3. チームワークで働く力（チームワーク）には⑦発信力、⑧傾聴力、⑨柔軟性、⑩状況把握力、⑪規律性、⑫ストレスコントロール力を挙げている。この「社会人基礎力」は当然、保育者にも求められる力といえる。野中ら（2016）は、保育士資格・幼稚園教諭免許状取得希望学生の2年生を対象に自己評価を実施している。この対象学生は、1年次に保育所及び幼稚園で各一回の見学実習を経験しており5段階評価で12項目ともに3評価を上回る結果をしていた。さらに2017（野中ら）年では、2年生、3年生、4年生を対象に自己評価を実施している。対象学年すべてにおいて「おおむねできている」と認識しているが、単位実習を経験した学生の自己評価の数値が若干低い傾向が見られると同時に⑪時間意識、⑫責任意識、⑭報連相、⑮他者との協働意識が平均点を上回っている結果を得た。対象学生は自己評価において社会人としての基礎力を肯定的に捉える傾向が見られると報告されている。

一方、山田（2016）によると保育学生の保育実習における消極的学習態度や答えが明確ではないことに取り組むなど、意欲的態度を発揮しづらい学習傾向の特性が課題として挙げられている。教職科目の総まとめとして位置づけられた「教職実践演習」において文部科学省ではアクティブ・ラーニングによる主体的な学ぶ意図を示している。学習方法の改革による必修科目であることはもちろん、本稿の保育者養成校に在学する保育学生にとってアクティブ・ラーニングが望まれる理由と合致するといえる。それは、これから目指す保育者の仕事の関わりも、いわばアクティブ・ラーニングであり、子どもの主体性を育むために必要不可欠な関わりだからである。小学校では授業時間と休憩時間が明確に区分されており、授業の時間割が事前に計画され、授業のねらいに則った授業内容が集団授業として提供される方法が主流である。しかし保育所や幼稚園、認定こども園においては全く視点が異なり、集団生活でありながら子ども一人一人の主体性を尊重した保育が求められており、その保育内容は各園による創意工夫に基づいた方法であるため多岐にわたるものの、基本的にアクティブ・ラーニングであるといえよう。図1は対象学生の仕事理解に関する変容を見るために初回授業前に「保育者の仕事」について尋ねた保育者の子どもに関するイメージのアンケート調査結果である。この時点で子どもと遊ぶこと、生活の基礎を培うこと、コミュニケーションを取ることが求められていると感じている。4月の大学入学間もない時期にこのように捉えられているのは、ニュースで保育に関

して取り上げられ認識する場面が増え情報を得やすい環境があることや、保育や教育に関する夢を実現するために入学する目的意識が明確な学生であることが考えられる。しかしながら保育者の子どもに関わるイメージアンケート調査の中で、特に幼稚園（図2）だけを取り上げて問いかけたところ、保育所が子どもを預かる場とする一方で、幼稚園は子どもに教育を行うイメージが強い学生傾向が特徴に挙げられる矛盾が生じている。従って、対象学生が有する入学時点の知識は幼少期の経験に基づくものや一般的なイメージやニュースなどによる情報が大半を占めることが考えられるのである。

本来、保育者に求められている子どもとの関わりの基本を理解し実践力を備えるには、保育実習や幼稚園教育実習だけでは賄うことが難しい。そのため、いかに授業においてアクティブ・ラーニングによる自主性を重んじた学修がなぜ必要かを理解することを伝えると同時に実践をひとつずつ経験として取り組んでいくことで、実習で保育者に求められる実践力の向上に繋がる準備が整うのではないだろうか。その時に「保育原理」で学んだ保育の原理と自分の実践を紐づけしながら取り組むことで理解が深まり知識の定着に繋がることを期待できる。一方、その取り組みをどの授業で保障しているのか、今後も検証していく必要がある。

1-6. 授業「保育原理」の授業方法と意図

本研究対象保育者養成校の大学1学年前期に配置される「保育原理」について、高校卒業後に保育の専門的知識の少ない保育学生が純粋に保育について向き合い知識

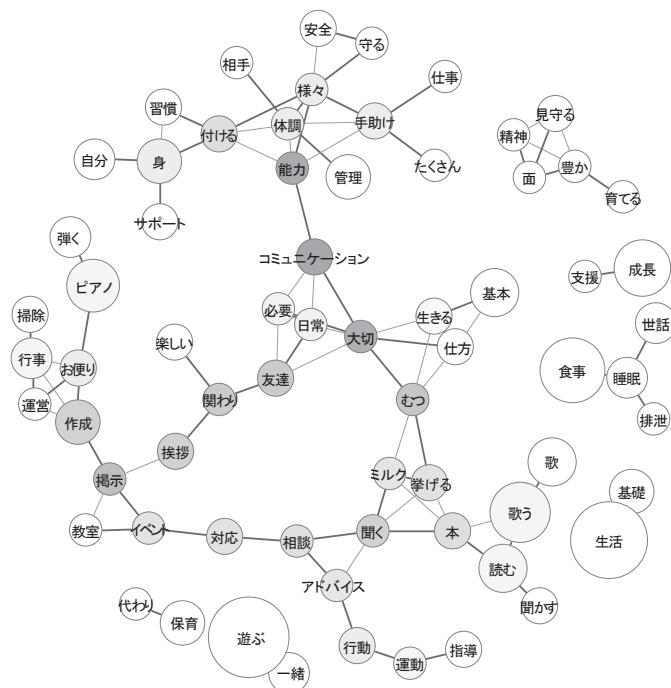


図1. 「保育者の仕事イメージ」アンケート結果

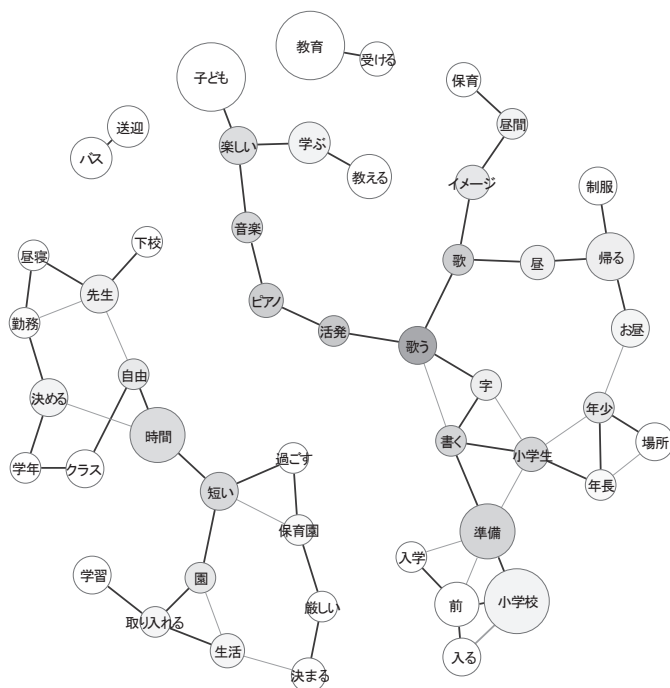


図2. 「幼稚園のイメージ」アンケート結果

を吸収しながら自らの考える機会となると仮説を立てた。保育者としての保育観や保育者像をもつことに自覚のない自らの意見の中にも保育の原理が存在することを意識づけできれば、今後の授業において自ら問いかけ、考えを深め問い続ける意識をもつきっかけになるのではないか。

そこで本稿では、「保育原理」の授業を取り上げ、保育学生自身の自己評価による学びへの成長の実感と保育に関するとの芽生えを個別に把握する方法の検証を行った。座学である「保育原理」の授業構成を工夫し、いかに主体的な保育に対する学びの構えの基礎を培うことが可能であるか、授業方法の検証を行い、今後の課題を明らかにすることを目的とする。そのため保育学生に対する保育者に求められる基礎力について自己評価による結果からその傾向について検証する。さらに、大学まで保育者としての憧れや夢を持ってきた漠然とした保育

の捉え方がどのように変容をするかを探り本授業方法の意義について学生のレポート記述内容から検証する。

2. 方 法

2-1. 授業実践の対象者

保育士養成大学1年生「保育原理」を受講する保育士取得希望の保育学生107名である。

2-2. 授業実践の内容

厚生労働省雇用均等・児童家庭局通知による指定保育士養成施設指定基準の保育原理の教授内容（表1）に準じ、シラバスに基づく授業計画（表2）をたてた。具体的には授業は次のような内容・手順で実施した。

授業における方法とその意図について説明を行う。授業15回を3期間と設定し、序盤はコミュニケーション能力を発揮する時期、中盤は、保育現場の場面を想定し

表2. 「保育原理」授業計画一覧

回	日	講義 (60分)	DVD/Text	ペア発表 (30分)
1	4/11	ガイダンス 1章 保育の意義 □最もふさわしい生活の場	概要 1巻2	授業のねらいと内容、進め方について
2	4/18	2章 保育の基本 ・子どもの最善の利益と保育 □養護と教育の一体性	1巻3	グループ・ペアの確認
3	4/25	3章 保育における「子ども理解」 ・発達のプロセス・子ども観、発達観と保育 □発達と生活の連続性	1巻4	・手遊びD
4	5/2	4章 保育の制度と現状 ・幼稚園教育要領・保育所保育指針 □環境を通して行う保育	1巻5	・手遊びE
5	5/9	4章 保育の制度と現状 □地域社会との交流と連携	2巻3	・手遊びF 発表の流れ確認・中間まとめ
6	5/16	4章 保育の制度と現状・諸外国における保育制度 5章 保育の歴史・保育施設の誕生と発展	A 24～27	①子どもをみる「まなざし」 事例3-1.
7	5/23	6章 保育の内容 ・保育の意義と目標	B 28～31	②子どもの行為の「意味」を探る 事例3-2.
8	5/30	6章 保育の内容 保育内容の基本的な考え方	C 38～41	⑤保育の中でとらえる「発達」のプロセス 事例3-3. 事例3-4.
9	6/6	7章 保育の方法 ・保育方法の基本的な考え方	D 134～137	②子どもとの関わりの中で求められるもの 事例9-1. 事例9-2.
10	6/13	8章 保育の計画 ・計画を立てることの意味	E 144～147	①子育て家庭の困難状況とその背景要因 1歳2か月の男の子の母の悩み
11	6/20	9章 保育者の専門性 ・職業としての保育者の資格制度と専門性	F 152～155	③家庭支援 事例10-1. 連絡ノートのやりとり
12	6/27	10章 家族援助と子育て支援 ・家庭援助の基本的な考え方・子育て支援の背景 □入所する子どもの保護者への支援	2巻2	・手遊びA
13	7/4	11章 健康・安全と多様な子どもの保育への対応 ・健康と安全に関する留意事項 ・多様な保育による対応 □最もふさわしい生活の場	1巻2	・手遊びB
14	7/11	12章 保育の現状と課題 ・保育の質と評価 □職員の研修	2巻4	・手遊びC
15	7/18	まとめ		

ながら学び合いを共有する時期、終盤は、仲間との連携を意識しながら学びを深める時期と想定し計画を立てた。授業は、理論の理解のために、テキストと映像による方法で理解促進を図った。大学1年前期の対象学生は、実際に乳幼児に関わってきた経験が乏しく説明内容を理解する手掛かりとして理論理解を補足するために有効であると考えたからである。そのため最初にグループ決めを行い、学生の自主性が発揮できるよう自分たちで決定できる環境づくりを計画した。具体的には、第1回目のガイダンスとして授業の目的と達成課題、授業の取り組みを説明したあと、グループ分けをするために全員でアイスブレイクとして集団ゲームを行った。この集団ゲーム内容に仲間集めの要素があるものを選択し、少人数で簡単に集まれる状態から次第に人数が多くなるようハードルを高くしながら、最終的には12名で1グループになるよう設定した。この際に、手を繋ぐことや声を掛け合うこと、駆け引きや協力をしあう経験をしながら、関係性をつくるように進行了。このグループをベースに、アクティブ・ラーニングによって理解を深める方法として4つの取り組みを実施した。

1つ目は、テキストに記載されている事例を取りあげ、その内容をペアで事前学習をし、決められた時間の中で、同じグループの学生に教授をする方法である。1つのグループを12人とし、6ペアが成立する。従って6事例を用意していずれかを担当するのである。対象学生が担当する事例内容やテキストのページ数は同数にして平等性を保った。そして事例別に事例別サポートシート(表3)を提供し、テキスト内容に即してポイントを説明し、どのようにメンバーと共にディスカッションをするとよいか事前学習が可能な具体的な方法を提示した。この事例別サポートシートには答えがない問いかけ

表記の文章とし、担当ペア学生が話し合い、自分たちで考えたり進め方を模索したりできる余地をのこし、短文でテキストの流れに沿って質問事項をまとめたものである。この事例別サポートシートを第1回目の授業で全員に、ペアで担当する事例のサポートシート配布をし、見通しを持って事前学習が行える時間を確保できる時間の保障を行った。さらに、ペアによっては初対面で緊張している様子も見られるため、授業中に二人で話し合い協力しあえる関係づくりのために手遊びや話し合いの自由時間を取った。

2つ目は同じペアで手遊びを展開するために保育者役になる場面である。同じグループの中でリードしながら共に遊ぶ時間を通じてコミュニケーションを図りながらアイスブレイクを行うことと、リーダー経験や模擬保育として保育者役になることで入学間もない大学生が連携をしながら保育者の専門性を学んでいる実感を伴いやすく、理論理解の促進に役立つと考えたからである。

3つ目は穴埋め式の学習シートと解答用紙を配付し、ペアで分担をして調べた担当箇所の解答をグループで共有する連帯責任形式の学習時間である。ペアで取り組んだ内容が間違っているとグループメンバーに迷惑がかかることを体験したり、役に立つ情報を発信できる喜びを味わうなかで、ほど良い緊張感を味わえたりする取り組みである。テスト範囲になることからグループメンバーで調べても分からない内容に関しては、担当者に直接質問をする行動を経験できるようになっている。

4つ目は出席カード(表4)である。これは毎回、出席確認をするとともに、小レポートにより学習内容を的確にとらえ文章化すること、学習状況を把握することが一番の目的である。さらに、自主性の自己肯定や、授業の成果を可視化できること、自己評価、他者評価による

表3. 事例別サポートシート例

Ⅲ 保育における「子ども理解」P24-27 1) 子どもをみる「まなざし」 【事例3-1】 幼児のいたずらは実験よ <input type="checkbox"/> 事例の内容を伝える ① 見方によって違って「みえてくる」子どもの姿 <input type="checkbox"/> 参加者の思いを簡単にまとめて伝える ② 子どもを見る目 ③ 子どもを見る目と子どものみ目の関係 ④ 子どもの内面を共感的に理解するということ 【反省・評価】 <input checked="" type="checkbox"/> 今日の話し合いから考えた事、わかったこと、気付いたこと、感じたことは何ですか <input checked="" type="checkbox"/> 必ず1人一回発言をできていましたか		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> ペアA </div>
	→事例の幼児は何歳だと思うか →その理由 →事例の男の子をどう思いましたか →事例の内容をどのように受け止めましたか →事例の中に、どんな見方がありましたか →とはどんなことですか →どんな関係がありますか →とはどんなことですか	

表4. 出席カード

保育原理A 学籍番号 氏名

	日付	学習態度		今日の役割		今日の学び（学習内容から考えたこと・意見）	第3者評価	合計ポイント
1	月 日	/2	予習	/4	ペア発表		/3	/20
		/2	復習	/3	手遊び			
		/2	理解度	/2	SP			
		/1	授業態度	/1	発言			
2	月 日	/2	予習	/4	ペア発表		/3	/20
		/2	復習	/3	手遊び			
		/2	理解度	/2	SP			
		/1	授業態度	/1	発言			
3	月 日	/2	予習	/4	ペア発表		/3	/20
		/2	復習	/3	手遊び			
		/2	理解度	/2	SP			
		/1	授業態度	/1	発言			
4	月 日	/2	予習	/4	ペア発表		/3	/20
		/2	復習	/3	手遊び			
		/2	理解度	/2	SP			
		/1	授業態度	/1	発言			
5	月 日	/2	予習	/4	ペア発表		/3	/20
		/2	復習	/3	手遊び			
		/2	理解度	/2	SP			
		/1	授業態度	/1	発言			
6	月 日	/2	予習	/4	ペア発表		/3	/20
		/2	復習	/3	手遊び			
		/2	理解度	/2	SP			
		/1	授業態度	/1	発言			
7	月 日	/2	予習	/4	ペア発表		/3	/20
		/2	復習	/3	手遊び			
		/2	理解度	/2	SP			
		/1	授業態度	/1	発言			
8	月 日	/2	予習	/4	ペア発表		/3	/20
		/2	復習	/3	手遊び			
		/2	理解度	/2	SP			
		/1	授業態度	/1	発言			
9	月 日	/2	予習	/4	ペア発表		/3	/20
		/2	復習	/3	手遊び			
		/2	理解度	/2	SP			
		/1	授業態度	/1	発言			
10	月 日	/2	予習	/4	ペア発表		/3	/20
		/2	復習	/3	手遊び			
		/2	理解度	/2	SP			
		/1	授業態度	/1	発言			
11	月 日	/2	予習	/4	ペア発表		/3	/20
		/2	復習	/3	手遊び			
		/2	理解度	/2	SP			
		/1	授業態度	/1	発言			
12	月 日	/2	予習	/4	ペア発表		/3	/20
		/2	復習	/3	手遊び			
		/2	理解度	/2	SP			
		/1	授業態度	/1	発言			
13	月 日	/2	予習	/4	ペア発表		/3	/20
		/2	復習	/3	手遊び			
		/2	理解度	/2	SP			
		/1	授業態度	/1	発言			
14	月 日	/2	予習	/4	ペア発表		/3	/20
		/2	復習	/3	手遊び			
		/2	理解度	/2	SP			
		/1	授業態度	/1	発言			
15	月 日	/2	予習	/4	ペア発表		/3	/20
		/2	復習	/3	手遊び			
		/2	理解度	/2	SP			
		/1	授業態度	/1	発言			

振り返りの重要性を理解できるよう作成したものである。一人1枚を毎回授業の終わりに記入したものを回収し、次回に返却する。記載項目は「日付」「学習態度」「今日の役割」「今日の学び（学習内容から考えた事・意見）」「第三者評価」「合計ポイント」の6項目である。「学習態度」の欄には、「予習」「復習」「理解度」が各2点、「授業態度」1点に、「今日の役割」は「ペア発表」4点、「手遊び」3点「SP（スペシャルポイント）」として2点、「発言」1点、「第三者評価」3点、合計20満点中何点かを自己申告で合計する。さらに今日の学びのコメントから特徴的な意見を拾い上げて、次回の授業の最初の10分程度に振り返りとして名前と内容を読み上げる。そのために内容で的確にとらえた文章や対象学生自身の意見や授業担当者（筆者）が共感した部分に赤線を引いた。15回の授業を通して全員受講者が、1人複数回のコメントを読みあげられるよう、筆者はチェックリストで把握を行った。また、文章の中で学んだ学習内容を踏まえ、対象学生自身の保育観や将来保育者として取り組みたいという課題発見をした記述には「芽生えポイント（図4）」として双葉マークを記入して返却することとした。

以上の4つ取組みの中で、対象学生同士が前もって調べておくこと、解らないことを克服する方法を模索すること、助け合い協働する環境に慣れ、積極的に学ぶ学習態度が定着することを目的とした。

3. 結果と考察

3-1. 「保育原理」における基礎力の自己評価の変容

授業初回と最終回に現在の基礎力についてアンケート調査を実施した（図3）。これは、社会人基礎力について「ストレスコントロール」、「規律性」、「状況把握力」、「柔軟性」、「傾聴力」、「発信力」、「想像力」、「計画力」、「課題発見能力」、「実行力」、「働きかけ力」、「主体性」の12項目について保育原理の授業を受講する初回と最終回に各項目別に5点満点で自己評価をしたものである。それぞれの社会人基礎力について、京都就職情報ネットが示す内容によると次のように説明される。「ストレスコントロール」はストレスの発生源に対応する力、「規律性」は社会人のルールや人との約束を守る力、「状況把握力」は自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力、「柔軟性」は意見の違いや立場の違いを理解する力、「傾聴力」は相手の意見を丁寧に聴く力、「発信力」は自分の意見を分かりやすく伝える力、「想像力」は新しい値を生み出す力、「計画力」は課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力、「課題発見能力」現状を分析し目的や課題を明らかにする能力、「実行力」

は目的を設定し確実に行動する力、「働きかけ力」は他人に働きかけ巻き込む力、「主体性」は物事に進んで取り組む力とされる。以上の12項目について大学初年次前期において「保育原理」の授業の受講前と受講後でどのような自己評価に変容をもたらすか検証を行った。

(1) 受講前

保育原理の受講前の自己評価の特徴として、平均値は2.8ポイント、項目別にみると最高値が「規律性」で3.73ポイント、最低値が「発信力」で2.40ポイントであった。社会人としてのルールや人との約束を守る力である「規律性」は高校時代までに日々の集団生活の中で重視され確実に培われた項目であったことが考えられる。また生活の中で対象学生も意識をして取り組んできた自覚があり、高得点であったことが考えられる。

一方、「発信力」は高校までの授業の形態が集団による一斉授業の中では、一人が一日の授業中に毎時間、発言を自主的にする場面が例え1回ずつあっても6回程度の頻度となることが予想される。さらにそのような発信の場は現実的に稀で、自ら自分の意見を分かりやすく伝える場面やその力量が少ないと感じた結果の表れであろう。

(2) 受講後

保育原理の受講後の自己評価の特徴として、平均値は3.76ポイント、項目別にみると最高値が「傾聴力」で4.32ポイント、最低値が「ストレスコントロール」で3.39ポイントであった。相手の意見を丁寧に聞き取る力である「傾聴力」は、表2の授業計画一覧で示すように、ペア発表の手遊びや事例発表で討論する時間が設けられている中で、グループメンバーの意見を聴く場面で意識され評価につながったことが考えられる。最低値の「ストレスコントロール」はストレス発生源に対応する力であるが、実施前より0.61ポイント高くなっていることから、対象学生の中には発表の場をストレスと捉えながらも対応することが出来ている実感があることが伺える。しかしながら、ストレス自体の発生が高まったかどうかは本データから読み取ることが十分にできなかったため、今後の課題としたい。

(3) 受講前後の比較

受講前と受講後の差が大きい項目は、「働きかけ力」1.16ポイント、「発信力」1.31ポイント、次いで「主体性」1.07ポイントであった。どの項目も、他人に働きかけ巻き込みながら自分の意見を分かりやすく伝えたり、自ら物事に進んで取り組んだりするという、ヒトやモノに関わる行為が存在する共通性が存在する。アクティブ・ラーニングによる授業方法を取り入れた一定の成果が表れた結果といえよう。

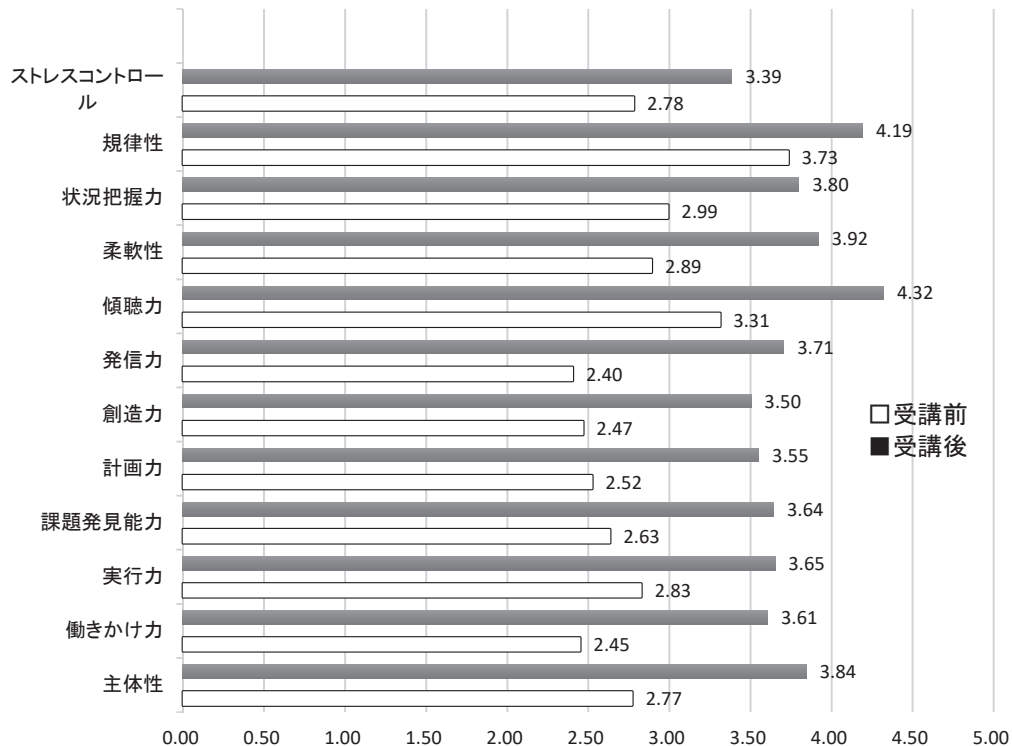


図3. 受講前後の社会人基礎力に関する自己評価

3-2. 出席カードにおける記述内容の変容

記述によって学習内容をまとめる今日の学び欄は小レポートの役割を担っており、学習内容から考えた事や意見を述べる事が求められる。実際には学習内容をわずか4行程度にまとめるものである。レポートは本来一定の文章量の中でまとめていくものであるが、あえて気軽に書けると学生自身が思えるように設定した。しかし一見見た目には簡単そうに思えるが、実際には様々な授業の内容を的確に集約し文章化することが求められるため技術を要することが求められるレポートだったといえる。授業毎に知識として知ったことを踏まえ、どのような自分なりの意見を持ったか「考え」を記載するように求める声掛けを意図的に行いながら、授業の最初には前回の学習内容の振り返りとして、レポート内容を毎回10名以上、異なる学習内容のポイントを的確にまとめた学生の名前とともに内容発表することを実施した。これは、学習内容が担当者（筆者）に認められたことを証明できるとともに、全員の学生にどのようにまとめることが求められ望ましいかのモデルを示したなかで要約力の向上の目的の達成を目指したものである。この発表は筆者がチェックリストで全員が複数回読みあげられるように配慮した。最終レポートの記述に文章力の向上を実感した内容が複数挙げられていた。したがって自分なりの要約力が認められたことや要領をつかむ機会となっていたことがうかがえる。また、対象学生のレポートで自分の考えや保育観、自己課題を明記した部分に「芽生え

ポイント」として双葉マークを記入することで、学びの質を可視化することができ、回を重ねるごとに書き方のポイントを押さえた内容へと変容していった。具体的な標記として「保育者として…を実践していきたい。」「…のような保育士（者）になりたい。」と自らが保育者として意識している表記が出現することとなった。その出現回数を図4に示す。この出現確認は、筆者が毎回授業後に全員のレポートを読み、前述した標記に沿った内容が出現したところに双葉のイラストを緑色で記入したものである。この可視化の方法を説明したところ、該当する標記と文章量が増加した。中には、4行では収まらず、次の回の部分に書く学生があらわるほどであった。そこで、その学生には、付箋をつけ、次のレポート欄に収まらない場合に利用してよいことを伝えた。このような積極的な文章表現の変化は、学生が求められる学びの内容を理解でき実際にまとめると伝えたいことが増え文章量の増加と書き方の具体的な方法を理解できたためと推測される。しかしながら約7割の対象学生の芽生えポイント出現回数が1回から3回であること、約19%の学生が芽生えポイントを獲得するレポート内容に達することが出来なかったことから、さらに、保育者に求められる限定された枠ぐみの中での確実に相手に伝える内容にまとめる文章集約力をつけられるよう、記録に残したくなる意欲を刺激した声掛けを行うことが必要である。また、国語力が向上するように本結果を他授業の担当者と共有した連携も今後の課題である。

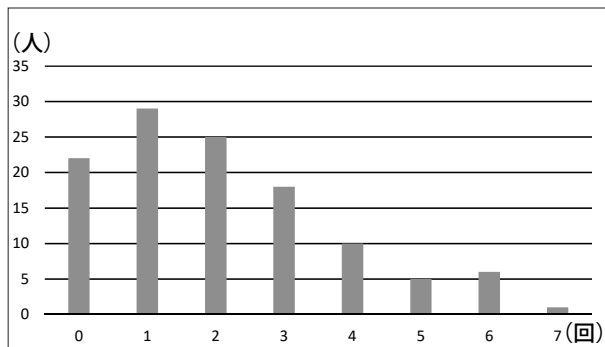


図4. 芽生えポイント数

3-3. 授業方法に関する自己評価

表5は学生にとって本授業の様々な授業の取組みの中で役に立ったと感じたものについて複数回答を得た結果である。テキストに次いで発表の場と手遊びの場が支持をされている。また、保育所保育指針が70%と高かったことの要因は、テキストに記載されている引用部分を保育所保育指針解説書でマークをしながら辿ることを取り入れたため支持されたと考えられる。大学1年の前期で保育所保育指針の重要性を受け止められたことは今後に関わる学習方法を検討する上で、大きな示唆を得たと言える。また、レポートの内容に関して複数回答はあるが、書くことが役立ったと自己評価している。保育において記録をすることは欠かせない重要なスキルの一つである。そのため「書く」ことが役立ったと自覚できた学生が存在することを踏まえ、さらに、その意義を単位実習に結びつけ、受講学生全員が理解し実践できる取り組みを今後も模索したい。

表6は、ある学生Aの15回の授業で行った取り組みをまとめたものである。社会人基礎力の自己評価をみると事前評価や事後評価や伸び率も平均的な学生といえる。また、芽生えポイントも3と受講をする中で意識が変化したことが伺える。受講学生107名の集団においてはとくに課題や秀でた点が特質となるデータとは言えない。しかしながら、第15回目の出席カードにおける今日の学び（学習内容から考えた事・意見）の欄に着目すると、本人の中で初めて出会った知識への驚きや知らなかったことに出会ったこと、それが保育士に繋がる必要な知識だと受け止めることでその知識が増えていくことの喜びを記している。「なんだか毎回成長していてすごく嬉しい気分」であったと感じられる感性と学ぶことを喜びと思うことは、まさに学び続ける保育者の原理であり、保育の質向上を求められる保育者の意識の芽生えを確認することができたといえる。本稿の取り組みを通じて、第1回から第15回までの一人ずつの学生の学ぶことへの育ちを課題としたことで見えた成果である。

また、学生Bの事例を見てみると、レポート内容は芽

表5. 役立った授業方法（自己評価）

内 容	人
テキスト	78
保育所保育指針	70
発表の場	75
手遊び	75
レポート	51
・書く	30
・読みあげられる	22
・得点化	11
・友人による得点化	6

生えポイント6を獲得し、自分体験を織り交ぜながら理論と実践と自己課題を見出すことが得意であることがわかる。しかしながら、テストでは再試を受ける状況で知識と思考力と文章力のばらつきがある特徴がみられた。点数化するテストだけの評価であれば理解不足で単位習得できない学生であると評価される。しかし、保育者としての感性や学び方の意欲などの学習態度に目をむけると大変評価の高い学生でもある。同じ学生であっても授業担当者の評価方法によって真逆の結果が生じることも十分理解した上で評価の方法を吟味する必要がある。学生の学びの変容や理解度を的確にとらえるためには、授業担当者自身が集団における個別指導の特性を理解する意識を高め、そして実行することが求められる。一人の保育者が育つために、学び方に個性が存在し、理解のペースや内容、達成度も異なることを理解しながら、養成校教員がどれだけ寄り添い、具体的な方法を提示しながらじっくり向き合うことを現状の業務の中で検討することが急務である。

4. ま と め

大学初年次前期における授業前の学生の幼児教育に関するイメージは幼稚園が教える教育を行う場で、保育所は子どもを預かる機関であると大雑把なとらえをするなど、組織の役割の理解等が少なかった対象学生は、保育原理の授業を通して、保護者とのコミュニケーションや生涯の土台を培う生活基本を担う役割や使命を意識し、学び続けることを始めた意義を感じている。授業担当者として「保育原理」の授業に求められる役割への理解を深めながら、今後も担当学生の傾向を的確にとらえ、課題に取り組んでいきたい。そしてこれからの保育者に求められる力量を備えた保育者を一人ずつ養成するその方法について今後も問い続けていきたい。

表 6. 事例：一学生の学修成果一覧

事例 A：

出席カード		
第 1 回 保育原理がどんなものか今日の授業を通して理解出来、これから深めていきたいと思います。	第 7 回 私は今回の事例だと一人ぼっちでいる子どもに対して私も手をとって周りの子たちとの遊びに参加すると思います。でも子どもたちにとってそれが+になるか-になるか一瞬で判断は難しいけれど、現場で事例のようなことがあった場合は今回のことをふまえた行動を心がけたいと思います。	第15回 今まで分からなかった歴史だったり知らないことだらけだったけど、少しずつ増えていく知識は、保育者になるために知っておくべきことだと思うとなんだか、毎日成長していてすごくうれしい気分でした。まだまだこれからたくさんの知識を詰め込み立派な保育士になりたいと思います。
社会人基礎力の自己評価	受講前	受講後
ストレスコントロール	3	3
規律性	3	4
状況把握力	3	4
柔軟性	3	4
傾聴力	3	4
発信力	2	3
創造力	3	4
計画力	3	3
課題発見能力	3	4
実行力	3	4
働きかけ力	3	3
主体性	2	3
平均	2.8	3.5
芽生えポイント	3	
役だった授業方法：	テキスト・発表の場・手遊び	

事例 B：

出席カード		
〔第 1 回〕 今日は「保育者」として知っておくべき基礎の考えを改めて考えさせられました。保育者は勉強を教えるだけでなく、子ども達の心に寄り添ってあげることが大事だと改めて考えられました。	〔第 9 回〕 私は虫が大の苦手です。また苦手な食べものもあります。保育士になったからといってすぐに克服できるとは思いません。しかし、自分が頑張っている姿を子ども達が見て成長できたらいいなと思うので、少しずつ私も子ども達と一緒に成長していきたいと思っています。	〔第15回〕 保育原理の授業を通して、保育士にとって必要なことを知ることができ、漠然としていた保育士像が少しだけはっきりして目指していく道を決めることができました。これから頑張ります。
〔第 7 回〕 私が幼稚園に通っていた時も自分の思っていることに気が付いてもらえず困った覚えがあります。確かに気持ちを読み取る能力があるわけではないから気持ちを汲み取るのは難しいだろうけど、子どもに親身になってあげられる先生になりたいです。	〔第10回〕 今日は発表をしました。時間配分が上手くできず改めて難しいと思いました。また一人一人の考えを発展させてあげるということをしたかったのですが、なかなかできなくて残念でした。でもこれは先生になった時にとても重要なことなので今から少しずつ慣れていきます。	〔テスト後〕 今日のテストを解いてみて、全然指針の内容を理解できていなかったのだと分かりショックでした。分かったつもりではなく、堂々と理解できていると言えるように何度も見直そうと思います。
社会人基礎力の自己評価	受講前	受講後
ストレスコントロール	2	2
規律性	4	4
状況把握力	4	4
柔軟性	3	3
傾聴力	3	3
発信力	2	2
創造力	4	4
計画力	2	2
課題発見能力	3	3
実行力	3	3
働きかけ力	3	3
主体性	4	4
平均	3.08	3.08
芽生えポイント	6	
役だった授業方法	テキスト・保育所保育指針・発表の場	

【参考・引用文献】

天野珠路、北野幸子編『保育原理』、中央法規、2015

井上敦『習熟度別少人数指導が学力に与える効果について－鳥取県の小学校別データを用いた分析－』政策研究大学院大学教育政策プログラム、P1-36、2014

小川圭子『授業方法の改善の取り組みに関する研究－保育原理にブリーフレポートを取り入れて－』湊川短期大学紀要第44集、P7-15、2008

厚生労働省『保育所保育所指針解説書』フレーベル館、2016

五嶋節『「天才」の育て方』講談社現代新書、P83-85、2007

佐伯一弥、金瑛珠、鈴木彬子、高橋優子『Workで学ぶ保育原理』、わかば社、2016

重成久美『4年制保育士養成課程における学生の子ども理解に関する一考察－保育原理の授業を通して－』活水論文集、第50集、P65-75、2007

住本克彦、『大学におけるアクティブ・ラーニングを取り入れた授業展開への試み－『保育原理』の授業実践を通して進める「主体的・対話的で深い学び」－新見公立大学紀要第37巻、P7-13、2016

高橋さおり、清水桂子『保育内容の総合的な理解を目指した保育者養成の検討－「保育原理」と「保育内容人間関係」の科目間連携を通して－』北翔大学短期大学部研究紀要、第53号、P89-95、2015

竹田好美『短大生のもつ子ども観－保育原理の授業を通して－』共創福祉、第4巻第1号、P55-63、2009

田中亨胤、『教授内容編成に関する実証的研究：保育原理関係の教科目を事例として（一般研究111・1部会家庭・就学前教育）』日本教育社会学会大会発表要旨集要録（34）、120-121、1982

田原良子、堀江美智代、竹内光悦『習熟度別クラス編成に関する考察(1)』鹿児島純心女子短期大学研究紀要31号、P215-244、2001

ドナルドショーン『専門家の知恵－反省的实践家は行為しながら考える』、ゆみる出版、2001

内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館、2016

中谷奈津子『保育士養成テキスト「保育原理」における教授内容の分析』社会問題研究、63、P1-12、2014

中谷奈津子『保育士養成テキスト「保育原理」の教授内容の分析(2)：保育の価値、意義、理念、原理の整理』社会問題研究、64、P1-12、2015

中谷奈津子『保育士養成テキスト「保育原理」の教授内容の分析(3)：「保育の原理」の探究を視野に』社会問題研究、66、P27-38、2017

菜原桂子『学生の主体的学習による保育の基本理解を目指した保育原理の授業実践』北翔大学短期大学部研究紀要第55号、

P133-138、2017

永見勇『保育とはどのような営みを意味するのか－保育原理、科学的態度、人間の存在のあり方との関連で－』名古屋柳城短期大学研究紀要、第28号、P1-11、2006

野中千都、山田朋子、中村恭子『「教わる力・学び取る力」を備えた保育者養成課程の開発①』、全国保育士養成協議会第55回研究大会研究発表論文集 P216、2016

野中千都、中村恭子『「教わる力・学び取る力」を備えた保育者養成課程の開発②』、第1回保育者養成教育学会、2017

野中千都、山田朋子、古相正美、坂本真由美、松藤光生、中村恭子、松垣淳子、吉松遊佳、吉川寿美『「教わる力・学び取る力」を備えた保育者養成課程の開発－目指す保育者像のずれを手掛かりとして－、中村学園大学教職教育研究会抄録集、P23-24、中村学園大学・中村学園大学短期大学部教職教育センター、2018

堀合丈子、自発性を尊重した幼児教育を一考する（その6）：倉橋惣三先生の保育原理を土台として、日本保育学会大会研究論文集、28、1975

松尾睦『職場が生きる人が育つ「経験学習」入門』ダイヤモンド社、P91、2014

森上史朗・柏女霊峰編『保育用語辞典〔第7版〕』ミネルヴァ書房、2010

森上史朗・大豆生田啓友『よくわかる保育原理〔第4版〕』ミネルヴァ書房、2015

森川敦子、山路加奈子、村田さち、川上みどり、羽地波奈美、濱田祥子、石井眞治『子どもの規範意識の育成－保育者の関わり方に焦点づけて－』比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究、第3巻、P78-87、2017

文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2016

山田朋子『保育学生による実習自己評価「学びの履歴」の課題』、全国保育士養成協議会第55回研究大会研究発表論文集 P124、2016

山田朋子『「保育・教職実践演習（幼稚園）」に関する一考察－親子遠足の模擬保育によるアクティブ・ラーニング』中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要第49号、P68-75、2017